

岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所）

はじめに

2023年に発掘調査された佐賀県吉野ヶ里遺跡 SC3037 石棺墓は、さまざまな意味で注目を集めた。

吉野ヶ里遺跡は、弥生時代後期には面積 40ha を超す大規模な環濠集落に発展し、後期後半から終末期には祭政の中核空間である北内郭・南内郭が備わるなど、集落としての最盛期を迎える。いっぽうで、墓地は中期には甕棺墓の大規模な列埋葬や特定有力者を埋葬した北墳丘墓が形成されるが、後期に入ると造営数が大幅に減少し、後期前半までで甕棺墓は基本的に終焉を迎える。それ以降も一定数の土坑墓・木棺墓・石棺墓などの造営が継続するとみられているが、出土遺物が少なく造営時期を含め実態を把握することがむずかしい状況にある（渡部・分部ほか 2020）。

こうしたなかで、吉野ヶ里丘陵地区IX区の未調査区域で新たに見つかった SC3037 石棺墓は、今後この区域で弥生時代後期後半～終末期の墓域が確認される可能性を示す貴重な発見となり、注目を集めた。SC3037 石棺墓は、長さ 3.2m、最大幅 1.7m の平面楕円形を呈する墓壇内に、板石を組んで蓋・小口・側を構成した箱式石棺墓である。蓋は 3 枚で構成され、全体で長さ約 2.3m、最大幅 0.75m である。身は内法の長さ 1.8m、幅 0.36m、高さ 0.27m である。小口板は各 1 枚、側板は各 4 枚の板石を用い、底面に石敷き等はない（佐賀県文化課文化財保護・活用室 2023）。

SC3037 石棺墓が注目を集めたいま一つの理由は、丘陵の高所を占める立地や、墓壇規模が大きいこと、蓋石に無数の線刻が存在するという特殊な状況などから、弥生時代終末期における一定の有力者の墳墓である可能性が指摘されたことである。6月の開棺調査では、赤色顔料の使用などが確認されたが、副葬品はなかった。線刻に関しては考古天文学の観点から多角的に検討がなされると思われるが、本報告では、この SC3037 石棺墓の墓制としての位置づけに関連し、弥生～古墳時代の箱式石棺をめぐりいくつかの視点を提示し、今後の検討に備えたい。

## 1. 普遍性

箱式石棺は小林行雄の解説によれば、「cist の訳語。板状または塊状の石材で 4 側をかこんで、人体をいれるに適した長さ 1.5～2.0m の粗末な箱状の空間を作り、上部にも同様な石材をおおった構造のもの」（水野・小林編 1959；799-800）である。新石器時代以降、世界各地に類似した墓制が存在する。

日本列島では、弥生～古墳時代が主な盛行時期であるが、縄文時代中期後半～晩期に東北北部から関東、中部高地にかけて類似した石棺墓がみられ、古代の官人墓にも箱式石棺を採用したものがある。構造が単純で、副葬品など年代決定の手がかりを欠く場合も多く、造営時期が特定できないケースが少なくない。

「古墳時代の棺とその歴史的意義」をテーマとした日本考古学協会 2010 年度兵庫大会のセッションでは、古墳時代の各種石棺の全国集成がおこなわれ、割竹形石棺 24 例、舟形石棺 252 例、長持形石棺および関連する石棺 60 例、家形石棺 1254 例が集成された。その成

果は『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』（日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会 2010）に収録されているが、箱式石棺は対象とされなかった。2015 年に茂木雅博がおこなった箱式石棺の全国集成では、弥生時代 902 例、古墳時代 2481 例の報告例が『箱式石棺 付・全国箱式石棺集成表』に掲載されている（茂木 2015）。したがって、古墳時代の石棺という括りで比較するならば、箱式石棺は他のいずれの石棺形式よりも多く存在する。弥生時代の石棺形式は基本的に箱式石棺もしくはその派生形のみであるので、弥生～古墳時代を通じて箱式石棺は石棺としてはもっともポピュラーなものであったと評価できる。

弥生時代の箱式石棺は、木棺墓・土壇墓・甕棺墓などと同じく集団墓地を構成する墳墓の一形態として存在する。したがって、「箱式石棺墓」あるいは単に「石棺墓」と呼ばれることが多い。古墳時代になると、古墳の主たる埋葬施設や従属的な埋葬施設として採用されるものが出現する。古墳の埋葬施設の場合、箱式石棺墓あるいは石棺墓とは呼ばれない。また、竪穴系埋葬施設で石棺や木棺が槨に相当する施設をもたずに墓壇内に安置される場合は「○○棺直葬」と呼ぶのが通例であるが、箱式石棺の場合は直葬とは呼ばず、単に「箱式石棺」と呼ぶのがふつうである。いっぽう、弥生時代とほとんど変わらない集団墓地に存在する場合は、弥生の石棺墓と同様に箱式石棺墓と呼ぶ場合が多い。

日本列島の箱式石棺は、巨視的にみると弥生時代には九州北部～中国地方西部にほぼ分布が限定され、古墳時代にはほぼ古墳の分布域全体に分布を広げるが、地域的な偏在性が著しい。

弥生時代の箱式石棺研究のメインは、北部九州～中国地方西部の縄文晩期後葉～弥生前期の資料を対象としたものである。箱式石棺墓の直接あるいは間接の起源は、弥生時代開始期に朝鮮半島から北部九州に伝わった支石墓の下部構造として採用されていたものとされる（森 1969、藤田 1987）。そのため、箱式石棺墓の系譜をめぐる諸課題は、支石墓、木棺墓との関係も含めて、弥生文化の形成を研究する上で避けて通れない問題として、近年まで活発な議論がある（宮本 2012、中村 2012、端野 2018）。

古墳時代の箱式石棺研究は、その地域的な偏在性を反映しておおむね地域ごとにおこなわれてきた。とくに茨城県南部から千葉県北部の東関東地域は古墳時代後期～飛鳥時代の箱式石棺集中域である（茂木 1966、大場編 1971、荒井 2024）。また、徳島県域は古墳時代を通じて箱式石棺が盛行し、学史上喜田貞吉と笠井新也とのいわゆる「阿波式石棺論争」が起きた箱式石棺集中域である（栗林 2002）。熊本県域では古墳時代の箱式石棺 490 例が集成され、その 9 割弱程度が墳丘をもたない箱式石棺墓とされている（島津屋 2009）。長野県森將軍塚古墳では、前期後半の前方後円墳の周囲に 64 基もの箱式石棺が従属的に設けられるという特異な状況が判明している（矢島ほか 1992）。

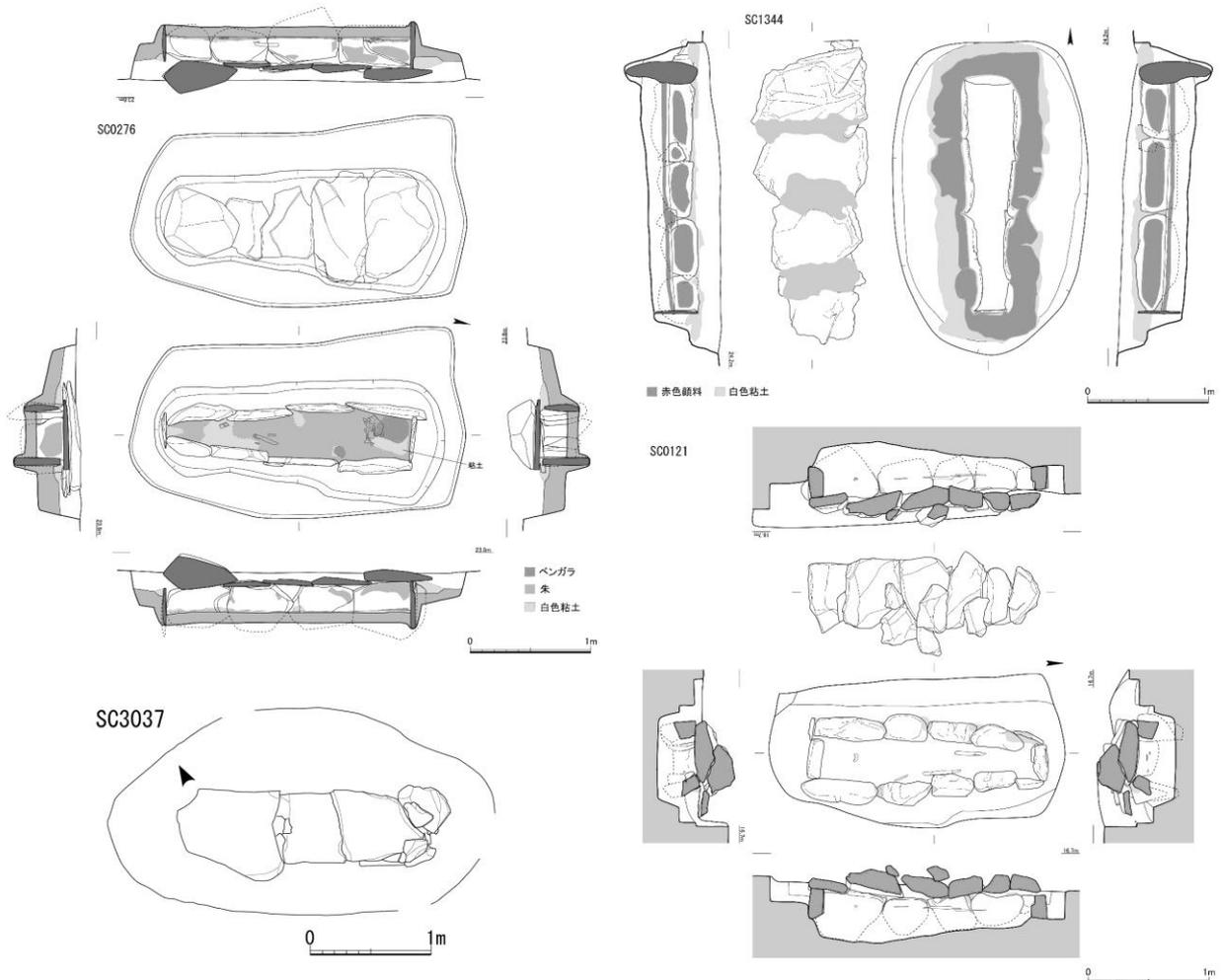
吉野ヶ里遺跡 SC3037 石棺墓は藤田等が I 型（北部九州・山口型）としたいわば通常タイプの箱式石棺墓に相当する。この種の箱式石棺墓の弥生時代前期における分布域は、福岡平野、福岡県周防灘沿岸部、山口県響灘沿岸部、佐賀県北部で、その出現時期は前期末とされた（藤田 1987）。北部九州・山口型にほぼ相当すると考えられる端野晋平分類の厚壁式は山口県中ノ浜遺跡などで前期中葉まで遡る確実性が高いとされる（端野 2021）。なお、福岡県田久松ヶ浦遺跡（原ほか 1999）で「石槨墓」とされた石槨状の配石をもつ木棺墓は、北部九州を中心としつつ島根半島や愛媛県中予地方、徳島県東部まで点々と分布を広げており、遺構の状況によってはこれまで石棺墓として取り扱われてきたものが多く含

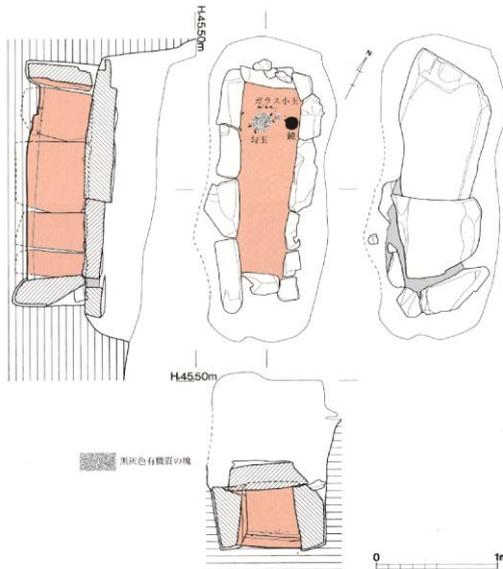
まれる可能性があることから注意を要する。北部九州で甕棺墓が盛行した弥生時代前期末～後期前半の間、箱式石棺墓は東へ分布を広げ、中期後半～後期前半には山口県東半部・広島県、さらに後期後半～古墳時代初期には西日本一帯に広がる（田崎 1989）。

吉野ヶ里遺跡 SC3037 石棺墓の時期は弥生時代終末期の可能性が指摘されている。吉野ヶ里遺跡においても箱式石棺墓は副葬品など年代決定の手がかりを欠くものがほとんどであるが、他の遺構との切り合い関係などから弥生時代後期～終末期と判断された箱式石棺墓は以下のとおりである。

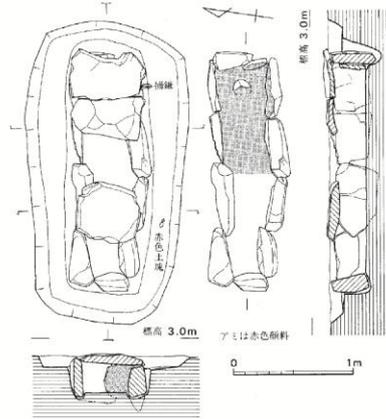
吉野ヶ里遺跡の後期～終末期石棺墓

遺構名	墓壙（単位：m）	石棺（内法・単位：m）	切り合い関係	特記事項	文献
SC0276	長軸 2.79 ×短軸 1.60	長軸 2.41 ×短軸 1.05	SJ0275(後期初頭) より新	赤色顔料 粘土	渋谷・渡部 2016
SC1344	長軸 2.62 ×短軸 1.63		SJ1356(中期末～後 期初)より新	赤色顔料	渋谷・渡部 2016
SC0121	長軸 2.46 ×短軸 1.29	長軸 2.00 ×短軸 0.76	SD0002 外環濠埋没 後	粘土	渋谷・渡部 2016

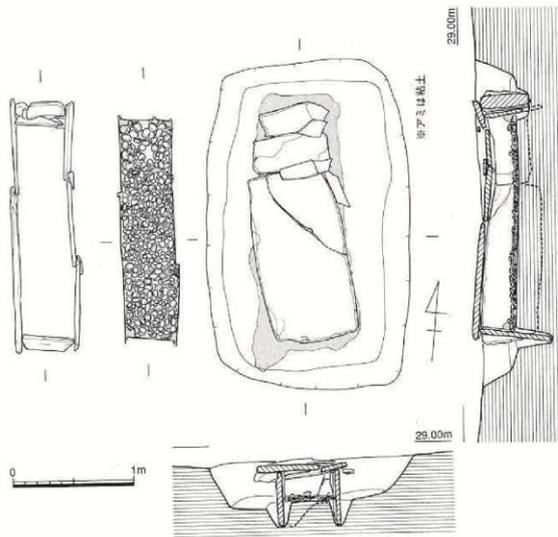




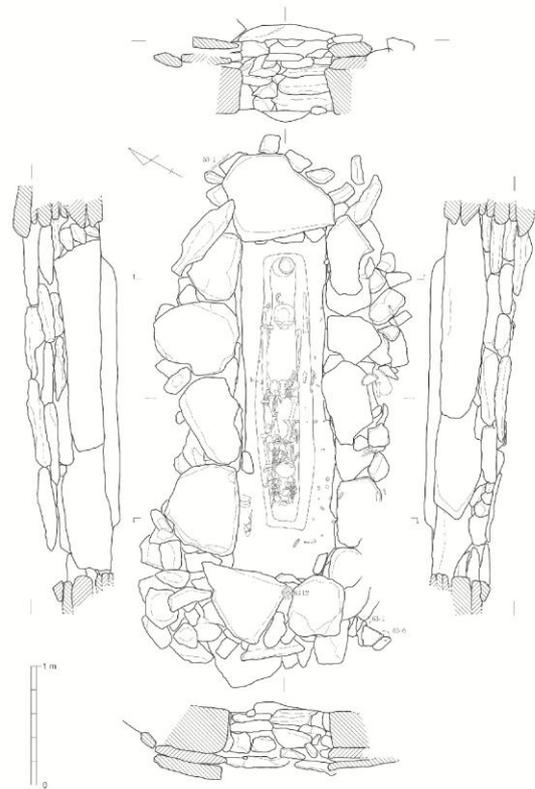
福岡・蒲生 37号墓【弥生後期後半】(山口ほか 2010)



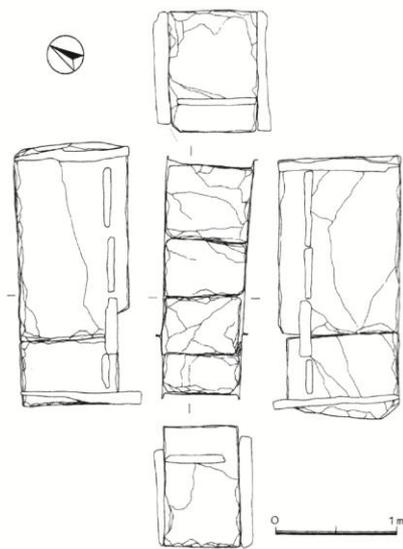
福岡・藤崎 1号方形周溝墓 4号主体部  
【古墳前期前葉】(浜石ほか 1982)



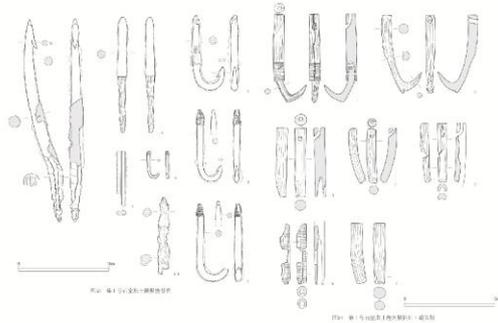
福岡・大井平野 S01 古墳第 5 主体部【古墳前期中葉】(白木 2004)



和歌山・磯間岩陰第 1 号石室【古墳中期中葉】(清家編 2021)



茨城・東台 5号墳【飛鳥】(小川・大淵 1991)



和歌山・磯間岩陰第 1 号石室出土漁労具 (清家編 2021)

箱式石棺の諸例 (弥生時代後期～古墳・飛鳥時代)

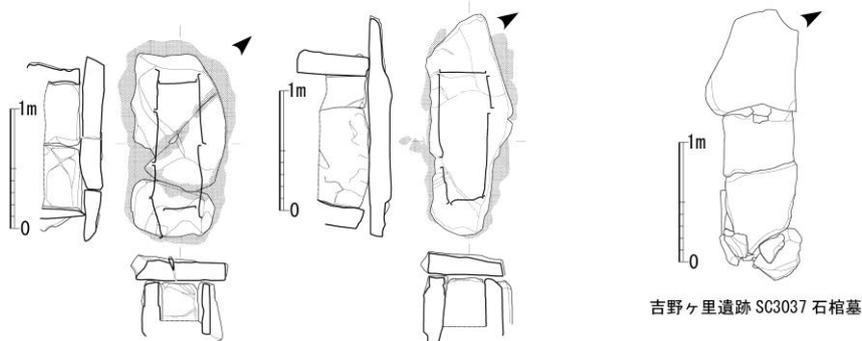
## 2. 階層性

吉野ヶ里遺跡 SC3037 石棺墓では、墓壇規模が比較的大きいことともに、その後の報道発表で蓋石が本来1枚の石材(重量約400kg)で、有明海を介して約40km離れた多良岳から運ばれたと考えられることが報じられ、一定の有力者の墳墓である可能性が示唆されている。

墓壇に関しては、規模とともに形状が整っているかどうか注目点になると考えられる。弥生時代後期後葉に中部瀬戸内を中心に展開する弥生墳丘墓の木槨(B類)から、古墳時代前期初葉(庄内式併行期)に分布域を近畿周辺まで広げた初期古墳の木槨(C類)への変化として、墓壇の大型化とともに、木槨の軸線を意識したシンメトリックな形状が整うことが指摘できる(岡林2008)。北部九州では福岡県平原1号墓(割竹形木槨)のように、それらに先行して墓壇の大型化と形状の整備を達成した事例もある(柳田ほか2000)。

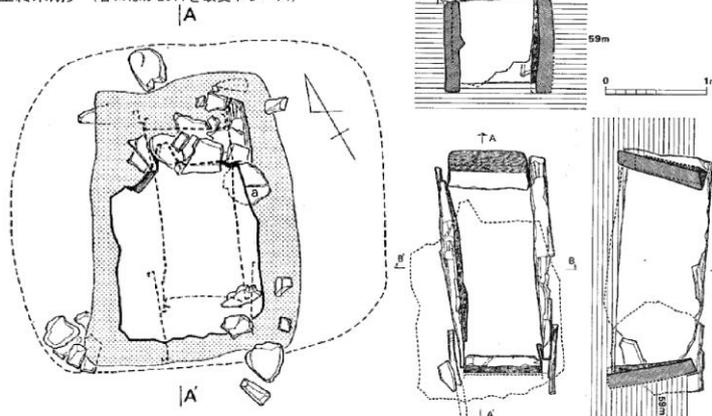
蓋石の大きさについてみると、北部九州の弥生時代後期後半～終末期には一定量の副葬品や水銀朱の多量使用がみられるような箱式石棺墓で、厚みのある大きな蓋石を使用するものがみられ、その傾向は古墳の中心埋葬施設に採用される箱式石棺にも受け継がれる。箱式石棺墓という括りの中での有力墳墓の特徴といえるであろう。

同時に、石棺そのものの形状の整備にも注意しておく必要がある。福永伸哉が「木石混用棺」(福永1998)と呼んだような、主要な部材を石材以外のもので代用した石棺(あるいは木材以外のもので代用した木棺)は、通常石棺(木棺)墓に比べて棺としての完成度がより低いものといえる。その対極には通常よりも整備された入念な構造・形態の石棺(木棺)墓が存在し、その点に弥生石棺(木棺)墓内部の階層性を看取しうるであろう。



吉野ヶ里遺跡 SC3037 石棺墓

福岡・城野遺跡1B1区方形周溝墓1号墓北棺(左)・南棺(右)  
【弥生終末期】(谷口ほか2011を改変トレース)

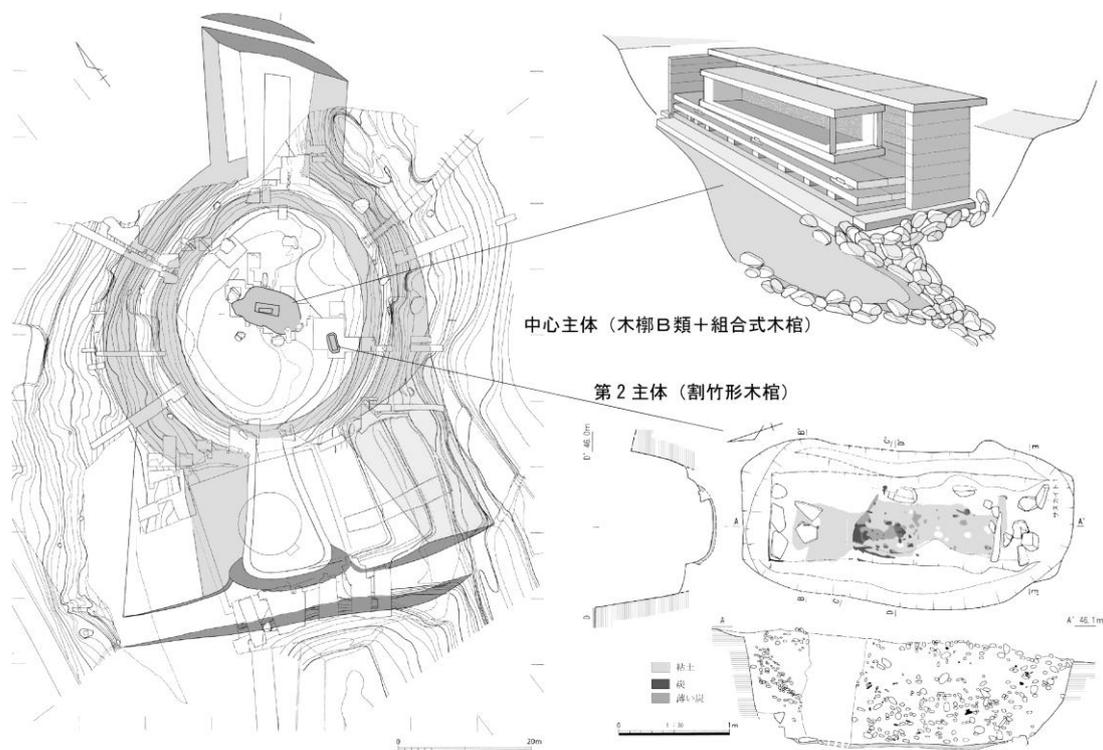


福岡・祇園山古墳墳頂部箱式石棺【古墳前期前葉】(石山ほか1979)

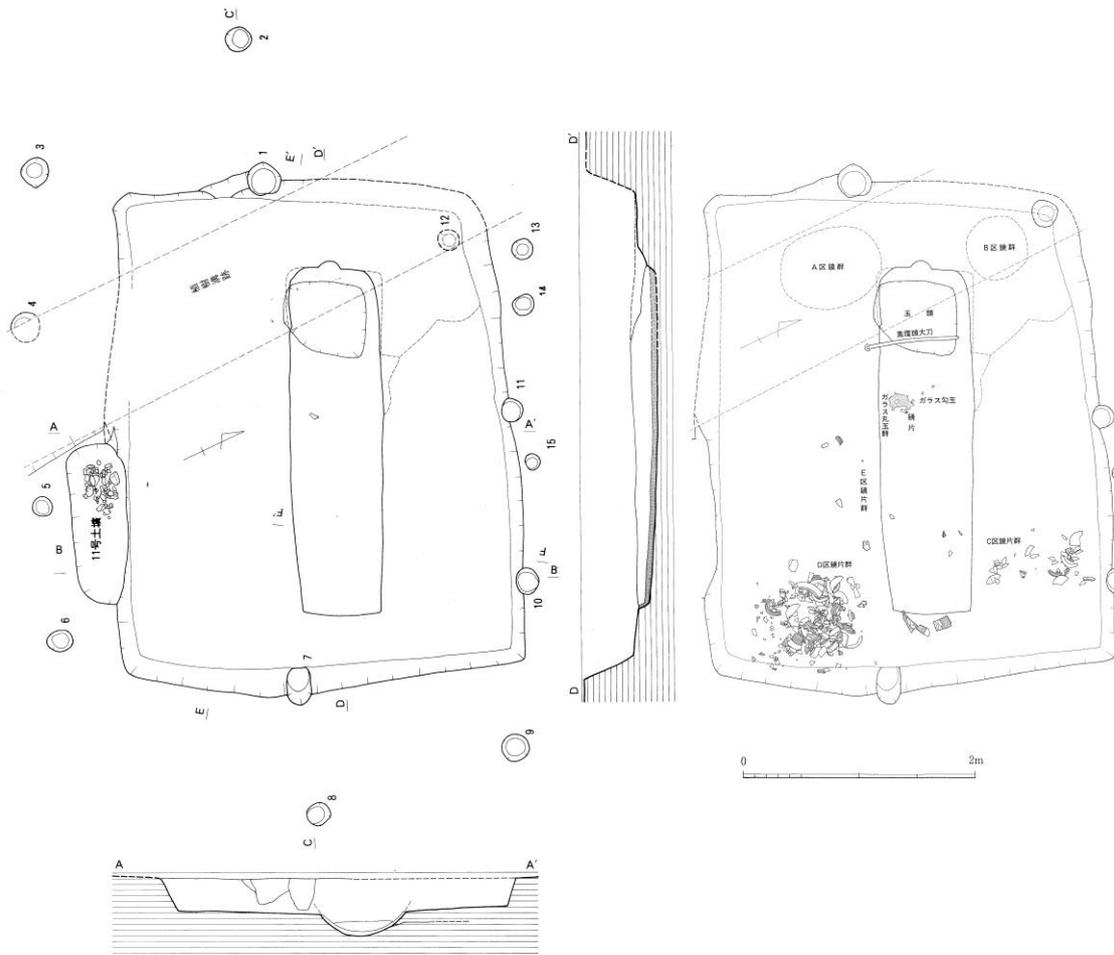
大きな蓋石を使用した箱式石棺

いっぽう、庄内式併行期という時期の中で日本列島全体を見渡すと、西部瀬戸内から近畿にかけては竪穴式石室の祖型となる木槨C類がすでに成立し、奈良県ホケノ山古墳では長さ5.3m、北側幅1.25m、南側幅1.05mという長大なコウヤマキ製舟形木槨（1類）が存在する（岡林ほか 2008）。またその前段階でも、木槨B類と組み合わせる棺は組合式木槨である。たとえば岡山県楯築弥生墳丘墓（宇垣 2021）中心主体部の木槨内に置かれた木槨は、厚さ約10cmの重厚な板材を用い、外形で長さ約2.2m以上、幅は約0.8~0.9mをやや上回る程度に復元される（岡林 2018）。木槨内は空間であり、この木槨は各部材を一定の強度で結合した、自立可能な木槨であったことになる。一般的な弥生木槨墓の場合には、棺の外側に裏込め土を充填することが前提であり、福永伸哉によるⅠ~Ⅲ型分類は部材（とくに小口板と側板）が内側に倒れないように固定する方法の違いに着目したものである（福永 1985）。その意味で、木槨B類と組み合わせる組合式木槨は一般的な弥生木槨墓の木槨とは構造的完成度の点で一線を画したものであったと考えられ、棺槨を構成する点からも、長大な刳抜式木槨が出現する前段階における最上位の棺形態であったと評価できる。なお、楯築弥生墳丘墓中心主体部木槨は棺内全面に水銀朱を厚く敷いており、総重量は32kgをこえる。

また、弥生時代後期~終末期の北部九州という中でみると、40面もの後漢鏡を副葬した平原1号墓の割竹形木槨は長さ3mに達しており、上位墓制の棺形態の実態をよく示している。福岡県吉武樋渡墳丘墓1号木槨墓（力武ほか 1996）、井原遺跡ヤリミゾ地区木槨墓群（江崎・檜崎編 2006）、佐賀県中原遺跡墳丘墓ST13414・ST13415（小松ほか 2021）など、一定の副葬品を有する有力墓では刳抜式木槨が卓越しており、平原1号墓の割竹形木槨もそうした流れの中で位置づけることが可能であろう。



楯築弥生墳丘墓の組合式木槨と割竹形木槨（宇垣 2021 一部改変）



平原 1 号墓（柳田ほか 2000）

### 3. 箱式石棺墓の系譜をめぐる議論—伝播のあり方

弥生～古墳時代の箱式石棺の分布をめぐることは、これまでも沿岸部に多いことが指摘されてきた。たとえば、考古学の立場から体系的に舟葬説を主唱したことで知られる後藤守一は、古墳時代における箱式石棺の東方への分布拡張には「特殊性」があるとして、以下のように述べている。「例を静岡県にとってみると、箱形石棺を有する古墳は、海岸に沿ってのみ分布している。静岡平野でいうと、久能山麓には多いが、静岡市の西側地域にはない。また関東地方に入っては、武蔵国にほとんどない。秩父山塊には緑泥片岩を産しているのに、箱形石棺を造るのに極めて都合がよいのに、その利用がない。といったように、その分布が帯状をなして東にひろがってきているのであって、平面的分布を示していない」。その上で、「この箱形石棺は民衆の墓のものに使われ易いということともに、何か特殊の「人」の群に結びついて発展してきたもののように思われる」（後藤 1958；185）と指摘している。

弥生時代の箱式石棺墓を含めた外来的な墓制要素が受容されるにあたり、海を越えたネットワークをもつ、海洋と関わりの深い生業の人々の集団（海民）の活動が大きな役割を果たした可能性を指摘する人は少なくない（小林 2000、新里 2013、中村 2016）。いっぽうで、弥生～古墳時代の箱式石棺墓そのものにその生業を示す遺物（たとえば漁労具など）

が普遍的に伴うわけではない。

視点を変えて、海民の埋葬遺跡であることをほぼ確実に示す海浜部の岩陰墓・洞穴墓についての清家章・濱田竜彦の検討結果を参照する。清家らは、弥生～古墳時代の岩陰墓・洞穴墓に弥生時代後期後半の多数の人骨を出土した鳥取県青谷上寺地遺跡 SD38-2 を加えた 17 件の遺跡資料について、古墳とは異なるという意味で特異と考えられる埋葬属性（特異な埋葬属性）12 項目を抽出して検討した。その結果、特異な埋葬属性は、同一地域の遺跡間では多く、遠距離間の遺跡ではゆるやかに共有され、さらにその共有は異なる時期の間でも認められることから、広域交流はゆるやかであっても長期的な継続が考えられることを指摘した（清家・濱田 2023）。そのような海洋を介した広域交流によって共有される埋葬属性の中に、海民にとってもっとも重要と考えられる舟そのものや舟を模した木棺（岡林が舟形木棺 2 類としたもの）を用いた埋葬とともに、磯石を利用した埋葬施設があり、そこに箱式石棺が含まれる。

早くに後藤が指摘した箱式石棺の分布特性、言い換えればその伝播のあり方の背景に、すべてではないにしても、海民の活動を媒介とした場合があった可能性を考えてよいかもしれない。ただし、箱式石棺の普遍性からは、広域交流を前提とせずとも類似した墓制が成立しうる可能性も留保せざるをえない。また、箱式石棺の階層性において、海浜部の事例は比較的低位に位置づけられるものが多いと考えられ、海浜部における事例の動向は箱式石棺の動向の一部ではあっても、箱式石棺総体の動向を左右するようなものであるかは疑問が残る。箱式石棺墓の伝播の実態を解明するためには、さらに踏むべきいくつかの手続きがありそうである。

岩陰墓・洞窟墓における特異な埋葬属性の共有状況と青谷上寺地遺跡(清家・濱田 2023)

		鹿角製品もしくは未製品の副葬	漁具の副葬	貝床・珊瑚床	磯石利用埋葬施設	ウミギク科の貝輪	土器祭祀(提瓶の多用)	埋葬姿勢(屈肢葬)	頭部分離	火葬人骨・被焼人骨	曝葬	二次葬	舟・舟形棺を用いた埋葬	
磯間岩陰遺跡	紀伊	○	○	○	○	○	●	○	○	○☆				
古目良岩陰遺跡		○	○					☆						
雨崎洞穴	三浦半島	○●	*		○				○●	○●	●	○●	○	
大浦山洞穴				△	△				■	■	△☆	■△		
海外 1 号洞穴		○	○		○	*					○●	○		
鴨居洞穴		*	*							*	?	?		
毘沙門 B・C・D 洞窟					□							□		
西ノ浜洞穴		□	□										△	
間口 A 洞穴		●		●	●							●☆	●☆	
間口東洞穴									△			△	?	
大寺山洞穴	房総半島										○●		○●	
鉾切洞窟										●	●		*	
五松山洞窟	東北	●	●				?		●		●	●		
岩谷堂洞窟	信州	○ or ●								○ or ●	○ or ●	○ or ●		
鳥羽山洞窟		○								○	○	○		
猪日洞窟遺跡	山陰	*									●●☆		■	
青谷上寺地遺跡		□	□						□	□	?	□		

(凡例)

●…弥生時代中期 □…弥生時代後期 △…古墳時代前期 ○…古墳時代中期  
 ■…古墳時代後期～終末期 ☆…歴史時代 \*…時期不明 ?…可能性があるもの  
 ・磯石利用埋葬施設については [中村 2022] を、曝葬については [山田 2018] の整理を参考にした。

※本報告では、近畿地方における庄内式併行期を古墳時代前期初葉と位置づける立場をとるが、九州地方に関する記述については、報文等にしがって弥生時代終末期とした。あくまで便宜的なものである。

〔引用文献〕

- 荒井啓汰 2024 『埋葬行為と社会的記憶からみた古墳時代の終焉』 六一書房
- 石山 勲ほか 1979 「祇園山古墳の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X X VII 福岡県久留米市所在祇園山・七曲山両古墳群の調査』 福岡県教育委員会
- 宇垣匡雅 2021 『楯築墳丘墓』 岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室
- 江崎靖隆・檜崎直子編 2006 『三雲・井原遺跡』 前原市教育委員会
- 大場磐雄編 1971 『常陸大生古墳群』 潮来町教育委員会
- 岡林孝作 2008 「日本列島における木槨の分類と系譜－ホケノ山古墳中心埋葬施設の成立背景をめぐって－」『ホケノ山古墳の研究』 奈良県立橿原考古学研究所，pp. 213-226
- 岡林孝作 2018 『古墳時代棺槨の構造と系譜』 同成社
- 岡林孝作・水野敏典・北山峰生ほか 2008 『ホケノ山古墳の研究』 奈良県立橿原考古学研究所
- 小川和博・大淵淳志 1991 『木田余台 I』 土浦市教育委員会
- 栗林誠二 2002 「『阿波式石棺』再考」『論集 徳島の考古学』 徳島考古学論集刊行会，pp. 489-530
- 後藤守一 1958 「古墳の編年研究」『古代史研究 第三集 古墳とその時代(一)』 朝倉書店，pp. 1-220
- 小林青樹 2000 「中四国における初期弥生墓制の変容－礫石使用墓と列状墓群の動向を中心に－」『古代吉備』 22, 18-32
- 小松 譲ほか 2021 『西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(11) 中原遺跡VI』 佐賀県教育委員会
- 佐賀県文化課文化財保護・活用室 2023 『吉野ヶ里遺跡特別公開パンフレット』
- 渋谷 格・渡部芳久 2016 『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の墓地－』 佐賀県教育委員会
- 島津屋寛 2009 「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金(基盤研究C)(研究代表者:杉井健)研究成果報告書, 熊本大学文学部
- 新里貴之 2013 「南西諸島の先史時代葬墓制の展開と石棺墓導入の背景」『徳之島トマチン遺跡の研究』 鹿児島大学, pp. 205-224
- 清家 章編 2021 『磯間岩陰遺跡の研究』 田辺市教育委員会・科学研究費磯間岩陰遺跡研究班
- 清家 章・濱田竜彦 2023 「海辺の埋葬遺跡における特異な埋葬属性と交流－和歌山県磯間岩陰遺跡と鳥取県青谷上寺地遺跡－」『国立歴史民俗博物館研究報告』 242, 61-81
- 田崎博之 1989 「石棺墓」『考古学ジャーナル』 312, 7-12
- 谷口俊治ほか 2011 『城野遺跡 1』(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 中村大介 2012 『弥生文化形成と東アジア世界』 塙書房

- 中村大介 2016 「支石墓の多様性と交流」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』6, 3-18  
日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会 2010『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』
- 端野晋平 2018 『初期稲作文化と渡来人ーそのルーツを探るー』すいれん舎  
端野晋平 2021 「初期箱式石棺の二型式ー薄壁式と厚壁式ー」『持続する志 岩永省三先生退職記念論文集』中国書店
- 原 俊一・秋成雅博・白木英敏 1999 『田久松ヶ浦』宗像市教育委員会  
福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32-1, 81-106  
福永伸哉 1998 「埋葬施設構築材の象徴性ー木石併用棺の存在意義についてー」『大阪大学文学部日本史研究室創立 50 周年記念論文集 古代中世の社会と国家』清文堂出版, pp. 3-9
- 藤田 等 1987 「石棺墓」『弥生文化の研究 8』雄山閣, pp. 98-104  
水野清一・小林行雄編 1959 『図解考古学辞典』東京創元社  
宮本一夫 2012 「弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係」『古文化談叢』67, 147-176
- 茂木雅博 1966 「箱式石棺の編年に関する試論」『上代文化』36. 33-46  
茂木雅博 2015 『箱式石棺 付・全国箱式石棺集成表』同成社  
森貞次郎 1969 「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』乙酉文化社, pp. 974-992
- 柳田康雄ほか 2000 「平原遺跡」前原市教育委員会  
力武卓治・横山邦継ほか 1996 『吉武遺跡群Ⅷ』福岡市教育委員会  
矢島宏雄ほか 1992 『史跡 森将軍塚古墳』更埴市教育委員会  
山口信義ほか 2010 『蒲生石棺群』（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室  
渡部芳久・分部哲秋・佐伯和信・米田 穰・七田忠昭 2020 『吉野ヶ里遺跡ー弥生時代総括編 1ー』佐賀県地域交流部文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室